

雨上がりの川

森沢 明夫 作

(164)

オカヤイツミ 画

第六章 それぞれのモノローグ(20)

【紫音の話】

「ここでもいいですか?」

「いいよ。窓の外を向いて座ってね」

言いながら、わたしもソファから立ち上がった。

春香がゆっくりと窓辺に胡座をかき、その後ろにわたしが立つ。

春香の後ろ姿は、背筋がすつと弓のように伸びていて、若々しく、張りがあって、とても美しい。

わたしは視線を上げて、春香が向いている窓の向こうを見た。

外は相変わらずの雨降りだ。

この世界は今日も救いようのないほど惨めな灰色に沈み、ずぶ濡れだった。

一瞬、わたしは、自分の過去に想いを馳せる。

遠い記憶のなかに残っている映像は、どれもだいたいこんな感じの灰色をしていた。梅雨という季節は、惨めなわたしの人生とよく似ているのだ。鬱々とした雨に降り込められて、小さな屋根の下から灰色の世界に出られずにいる。ずっと。ずっと。



それでもいま——、と思い直して、わたしは胡座をかいた春香の頭を見下ろした。

さらさらの髪の毛と、きれいな肩のライン。

わたしには、この可愛らしい癒しがある。

そう、癒し。

わたしは女性に恋をする女子ではない。だから、恋愛とは根本的に違った愛情をこの娘に感じているのだろうと思う。それがいったいどんな種類の感情なのかは、正直、自分でもよく分からない。けれど、もしかするとこれは「母性」に近いのではないかと、そんな気はしていた。春香を見ていると、心の底から「守ってあげたい」という思いが湧き上がってくるからだ。

「春香ちゃん、まずはリラックスしてね。ゆっくりと三回、深呼吸をしてみてください」

「はい」

と答えて、素直に深い呼吸を繰り返す少女。

「そうしたら、ゆっくりと目を閉じて。閉じたら、呼吸を自然な状態に戻してね」

「はい」

春香は、わたしの言うがままだった。わたしの言葉は何であろうと信じてくれるし、必ず「イエス」と言ってくれる。愛くるしさで、つい後ろから抱きしめたいような思いに駆られるけれど、さすがにそれはやめておいた。